

四万十川の川舟、造り上げる舟大工。

清流通信の読者のみなさん、こんにちは。
今回は、四万十川の「川舟」についてお届けします。

四万十川に浮かぶ川舟は、上流域・中流域・下流域とそれぞれ川幅・流れ・漁の違いから、その特性に応じた形態となっています。例えば、舟の先端。上・中流では二股になっていますが、下流用はそのような造りではありません。この二股は、舟の位置や方向を確保するための碇（いかり）を通すためのもので、友釣りの際に活躍します。したがって、友釣りを行わない下流では必要ないのです。ちなみに、舟の全長は下流へ行くほど長くなり、最大幅も下流へ行くほど広がっています。

このような川舟を造っているのが舟大工さんです。四万十川中流域・幡多郡十和村在住の中脇定義さんもその一人。幼い頃から舟に触れ、先代である父の作業を見てきたという中脇さんは、指導を受けたり修行をしたわけでもないが、いつのまにか自分でも造れるようになっていきました。実際に乗って舟を研究しながら形を造っていくというのが、中脇さんのスタイルで、そこにはご自身の漁の経験も生かされています。驚きは、設計図を描かないということ。小さい舟でも大きい舟でも、自分の頭の中でイメージしながら工程を進め、約1ヶ月あれば完成するそうです。中脇さんの舟は、“中に水が入ってこない”と川漁師の間で評判。それはどんなに真似ようと試みても、決して盗めない技術ということでした。

魚の種類が多く漁業資源が豊富な四万十川。川で生計を立てる川漁師が現存していること、昔と変わらず木造船が活躍していることは、全国的に見ても大変珍しいのだそうです。しかし近年は、以前と比べ魚が少なくなったため川漁師も減り、それに伴い川舟の需要も減少しています。後継者がいないこともあり、舟大工という川と共に生活してきたからこそ生まれた職業、培われてきた伝統技術が、このままでは失われる可能性があります。

中脇さんが若い頃には、四万十は魚でいっぱいだったそうです。川についてたくさんの想いを語ってくれた中脇さんは、最後にこう話してくれました。「いつまでも漁ができる川のまま、四万十川を大事にせんといかんね」。



昭和57年以来、舟を造り続けている中脇さん。



機能性と安全性が第一。竿一本で楽に操れる軽い舟を造っている。

Topics

「よさこい高知国体夏季大会」中村市で行われる競技は、「ボート」!

この競技では「直線で1000m+αの橋脚などの障害物のない水面」と「秒速15cm以下の遅い流速」が必要。したがって、この種目のほとんどは「ダム湖」で行われるのが通常ですが、四万十川は、なんとこの条件を満たしているのです!ちなみに、国際大会は2000mの直線が必要ですが、こちらもクリアしているので、この川の大きさと勾配の緩さからくる雄大なたたずまいは、まさに国際的といえます。ただ、大雨が降ると1週間は流速が安定しないので、四万十川での国体は「天候」との勝負になりそうです。(四万十太郎) ●競技期間:9月21日(土)～9月24日(火)
よさこい高知国体HP→<http://www.pref.kochi.jp/~kokutai/index.html>